

修学旅行

高知 五年 だいすけ

「修学旅行には行かせちゃうき心配しなよ。お父さんらあ行けんでこまっちゃよったき、修学旅行には行かせちゃうき心配しなよ」
いつも大きい声を出す父が
かれたようなかぼそい声で言った
夜

夕食のあと
父と母はテレビを見ながら
お金の話をしていた
父と母のしがめた顔を見たとき
「またか」

と胸がしんどかった
なぜか
顔からあせが出て
すぐ体が熱くなってきた
修学旅行にいくために
一年の時から
毎月ためてきた貯金も
引いた

「お金がたりんき」
と言って引く時も
ただ ぼくは
「うん」
と言っただけだった
でも

さっきの父の声とことばを聞いて
返すことばが出なかった
父と母がお金にこまっていることが
部落差別のせいとわかっていても
やっぱりしんどかった
ふとんの中でなみだが少し出てきた
パジャマのそでで
なみだをふきながら
もう修学旅行はいかんとろうか
と思った

